信玄公護身旗の梵字真言に就いて

白　石　真　道

(1) ま え が き

音に名高い大菩薩峠の麓——といつても海抜約1,000メートルの高台に、裂石山雲峰寺は聳え、遙に甲府盆地、笛吹川を見下ろしている。ここは武田家代々の祈願所であつて、その観音堂には戦勝の度ごとに、戦勝記念の明神旗を納めて、その数17に上つた。勝頼公戦死の後、一族郎党は天目山から尾根伝いにここに逃れ、宝物の類を奉納したものが伝えられている。就中、信玄公の護身旗、戦勝旗、孫子旗などがあるので、山梨大学でも、美学の井上政次教授主唱で調査班がつくられ、人文地理、歴史学の泰斗藤田元春博士、新鋭の学究山口康助学士、他に数名の学生も加わり、県文化財委員伊藤祖孝氏東道で、秋風膚を刺すお山を訪れたのは昭和28年11月20日のことであつた。山上では山主中村雄禅師総代矢崎村長等の心からなる歓待を受け、火燵に暖をとり、熱いお茶などもいただき、私には高野山上の冬の生活が思い出された。

さて庫裏に展示されたものは次の4種類の旗であつた。

(い) 信玄公の護身旗、1旒、長さ1丈、横幅1.5尺。①

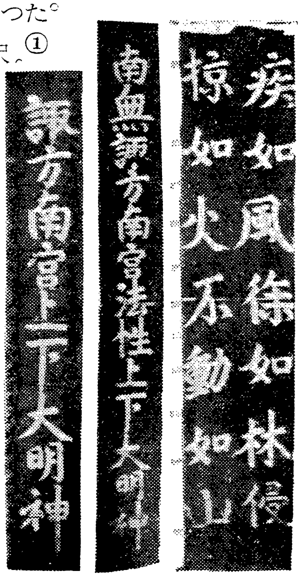
これは赤地に金字、中央に『　諏方南宮上下大明神』とあり、その周囲に黒梵字63あり。この旗は信玄公が陣頭に立つとき、常に身辺に樹てて以つて護身の旗とされたものである。

(ろ) 戦勝記念旗、13旒、維新以前には17あつた。長さ1.23丈、横幅1.6尺。

これは黒地に赤字、両面打抜きで『南無諏方南宮法性上下大明神』とあり、信玄公が戦勝ごとに一旒づつ、同寺の観音堂に奉納されたものである。

(は) 孫子旗、6旒、維新以前には9旒あつた。長さ1.26丈、横幅1.6尺。

これは黒地に金字、両面打抜きで、孫子の兵語中の『疾如風、徐如林、侵掠如火、不動如山』が2行に書かれている。



(い)　(ろ)　(は)

(に) 信玄公の馬印旗１旒。

(２) 護身旗の梵字

さて私に与えられた課題はこの護身旗の63梵字を判読することであつた。その文字はすべて正しく美しく謹書されてよく読めるし、[2]梵咒であることはすぐ解るが、何様の[2]お真言であるか明でない。またその文意も判然しない。これを解く為に先づ旗の中央の漢字名号を明かにしたい。そのわけは、梵咒が献げられた佛、菩薩または明王は漢名の『諏方大明神』の本地身ではないだろうかと考えられるからである。

(３) 諏方大明神

この大明神は諏訪神社の主祭神たる建御名方命であることは明かで、この神は古代から、その時代時代の生活様式の変化に応じて、狩猟、農耕、武運の神として、民衆の尊崇の的であり、国つ神の系統に属していたものと考えられる。民心収攬、志気高揚の為に、護身、戦勝の軍神として、信玄公がこの神を選ばれたのは至極尤もなことである。

さて護身旗にも戦勝旗にも『南宮』とあるは何を指すか。この両旗には『諏方南宮』とあるけれども、甲斐国東八代郡一宮村末木にある慈眼寺に奉納されている錦七条の袈裟は信玄公が川中島の合戦に着用されたものだが、その裏に墨書された献文には『上諏方南宮法性大明神』とあるから、旗に『諏方南宮』というは正確には『上諏方南宮』であることが明かとなつた。そして上諏訪の南方の宮といえば諏訪神社の上社を指すこととなる。

次に両旗には『上下大明神』とあるが、袈裟裏書には『上下』の字がない。この両字は無い方がはつきりする。何となれば『上下』とは『上社下社』であり、上社は彦神を主祭神とするに対し、下社は姫神たる八坂乃売命を主祭神とするから『南宮』という限り、下社は含まれないし『上下大明神』といえば南宮というのがおかしいのではないか。袈裟裏書の文ではこの矛盾がない。

更に『法性』の語は袈裟にも戦勝旗にも見えるが護身旗には欠けている。この語は有つてもよいが、無くてもよい。何となれば明神なれば当然、本地身たる明王の法性を具えているわけだから。

(４) [3]毘沙門天王（一名多聞天王）

さて諏方大明神として垂迹された本地の明王は何様であろうか。諏訪神社史にそれがどう伝えられているか明かでないが、それは恐らく毘沙門天王ではなかろうか。この天王は四大天王[4]の一である。四天王はその眷属を率い来つて、[5]正法（＝妙法）の行われる国を鎮護し給うものと信ぜられている。五重

の塔に祀られるときは持国天王は東面し、増長天王は南面し、広目天王は西面し、毘沙門天王は北面し、その持場を分担する。しかるに聖徳太子が難波に四天王寺を御造営の際には四天王とも皆西面せしめられたとのことで、これは全く太子の御創見にかかるものであつた。即ち当時、国の憂いはただ西方に限られたのであつた。後世彼岸の中日に、浄土を欣求する徒が四天王寺西門前に集り、西方安楽国の東門に当る日没を遙拝したが、この寺がいつも西方と結ばれていたのは奇縁といわねばならぬ。

さて毘沙門天王は前述の如く北方守護の武神、財神として民衆の人気を鍾めていたが、一方わが国史では『征夷大将軍』が重職であつたことから見ても、国史即『征夷』史、厳には『征夷狄』史で、後には主として『征狄』史となつたのだから、北面分担の毘沙門天王が武人に尊崇されたのも亦自然であつた。

それはともかく信玄公は常に戦陣の間に、毘沙門天王の小さい木彫像を持佛として身辺に奉持していたが、それが慈眼寺に現存している。それ故、護身旗の周囲に毘沙門天王の梵咒を配したとすれば、中央の諏方大明神の御加護と共に益々神秘咒力の効果は偉大なるものとなるし、諏方大明神の本地身を毘沙門天王と見たとすれば神佛両道の信仰が統一されたこととなるわけである。

そうしてまた事実、護身旗の左行梵字上から5字は『毘沙門（天王）の為に（帰命す）』[6]と読まれる。下端の4字（3語）は金剛部（又は忿怒部）諸尊の咒の結句にしばしば現れる慣用句[7]であるから、この一咒は毘沙門天王の咒と見て差支ない。ではこの咒の発端は何処であろうか。恐らく、右行下から9字目のoṃであろう。この聖音から最後の句までは要するに『帰命毘沙門（天王）！』の一咒で、多くの語句はこの天王の徳をたたえたものであろう。

（5）右行の神名

大体、咒の発端は oṃ か namas(namo, namaḥ) である。この旗には上端中央に oṃ 字があるから、この旗には oṃ は2字あるわけで、結局二咒と見られる。で第二咒は前述の毘沙門天の咒と見られるが、第一咒はどうであろう？この中に神名らしいものが2字（1語）づつ3度出でいる。この語はŚedhyiṃ[8]としか読めない。これは『諏方神（すわじん）』という和名をそのまま梵咒に挿入したものかも知れない。そんな例が常用普通真言集などにも見えている。

しかし『帰命吉祥天女[9]』と読むのかも知れない。吉祥天女は美と幸福との女神で、後には財宝をも司り、佛教神話では毘沙門天王妃とされ『吉祥寺』の本尊は毘沙門天王であるのが普通である。しかし、この両天の咒は大小広略いろいろあるけれど、大正大蔵経（巻21）にもこの梵咒の原本らしいものが見当らない。若しこの女神を指すとなれば、それは諏方明神妃たる八坂刀売命の本地身と見た為と考えられる。

（6）梵 咒 の 意 味

梵咒の意味は結局よく解らない。元々解らないでもよい咒文であつたのかも知れない。今日の英詩などでも、必ずしも全文意味のよくとれるものばかりとは限らないし、解らないものはそれでよい、ただ芸術的の美がそこに表現されておればよいとされている。神変不思議の秘力に充ちた咒文ら尚更で、宗教的に人心を引きつける力が宿つておればそれでよい。すべてを悟性のみによつて解決するの要はない。諏方大明神の威力を被り、毘沙門天王の法力が通じて、軍兵の志気が揚ればよい訳である。それ故、護身旗の梵咒はそれだけで十分の効果を発揮し得たのである。弘法大師は『真言ハ不思議ナリ、観誦スレバ無明ヲ除ク』と説かれたが、暗誦だけでも、それなりの力があつたのである。

（7）梵 咒 の 書 家

ではこの梵字を誰が書いたか？それは恐らく慈眼寺第六世法印宥空上人であろう。宥空法印に対する信玄公の信任の厚かつたことは、慈眼寺第18世栄秀が享保12年（1727A.D.）に木版に起した『薬師如来縁起』（附録に掲ぐ）に詳しく見られる。尚、袈裟裏書は宥空の書に相違ないが、そこには梵字は書かれてないので、梵字書体の比較ができないから、それに依つて書家を判定することができない。また袈裟裏書の漢字は達筆の行書体であり、旗の漢字は楷書の謹写であるので、漢字書体の比較は専門書家の判定に待たねばならぬ。

（8）梵咒の本文（63字）

梵　　咒

——写真と照合されたし——

（上端中央）　oṃ

（右行上から下へ）śedhyiṃ⑧ cece＊ kaṃ kaṃ yamaṇi traṇai hoṃ vetuve śedhyiṃ śedhyiṃ!

（第2咒）oṃ yape mape yatai yatai（左行上から下へ）Vaiślimanaya⑥ saḥ raiṣyaṅkvaṃ iṣatūḥ maṃpratraṇi khaṃgarya gaṃnarya mamare tramaḥ tramaḥ（下端左から右へ）hūṃ hūṃ phaṭ !

＊　　和　　訳

オーン

吉祥天女（又ハ諏方神）チェー2 カン2　ヤマニ　トラナイ　ホーン　ヴェートゥヴェー　吉祥天女2（又ハ諏方神2）！

オーン　ヤペー　マペー　ヤタイ　ヤタイ（又ハ　マタイ）2 毘沙門（天王）に！サハ　ライシヤンクワン　イシヤトゥーフ　マンプラトラニ　カンガリヤ　ガンナリヤ　ママレー　トラマハ　2　ウン）（ウン）（パッタ！（忿怒・破摧の擬声）

＊　cet cet! は犬を呼ぶ声

（9）附録第一毗沙門天王と吉祥天女の陀羅尼②

今、参考の為、流布の木版本に依つてこの天の梵咒を次に掲げる。

（イ）毗沙門天王大身陀羅尼

——不空訳、毗沙門別行儀軌に出づ——

梵 呪	和 訳
namo ratna-trayāya!	南無三宝！
namaś caṇḍa-vajra-pāṇaye mahā-yakṣa-senā-pataye!①	南無烈しき金剛手、夜叉の大軍主に！
namo athahuro-bhūtarāya dhiḥśaya! Vaiśramaṇa-vacanasya mahā-rājasya yakṣâdhipatasya vama-tasya sutasya bhaśana pravaha-dasya hemadaṭa ṭani praṣayāmi, tad-yathā **kuśemi 2 kuśa** Viśra-maṇasya mahārāja evaṃ dhaka netramakṣatu svāhā!	ソワカ！（成就あれ！）

(①版：sena-pātaye)

（ロ）毗沙門天王大心陀羅尼

——不空訳、毗沙門天王経に出ヅ——

梵 呪	和 訳
namo ratna-trayāya!	南無三宝！
namo Vaiśramanāya mahā-rājāya, sarva-satt vānām② āśā-paripūraṇāya, siddhi-karāya, skanda-nāthāya*!	南無毗沙門大王、一切衆生の欲願を充満するものに、悉地（＝成就）を成ずるものに、将軍主に！
tasmai namaskṛtvā imaṃ Vaiśramaṇa-hṛdayam āvartayi-ṣyāmi③ sarva-sattva-sukh'āva-haṃ, tad-yathā:	かの（尊）に稽首して、この毗沙門心（咒）を我は宣説せん、一切衆生に安楽をもたらす（咒）を、咒に曰く：
oṃ simi 2④ sumu 2 caca 2 cara 2 sara 2 kara 2 kiri 2 kuru 2 muru 2 curu 2 sādhaya arthaṃ mama! nitya-mathanôdhāva svāhā!	オーンシミ2 スム2 チャチャ2 チャラ2 サラ2 カラ2 キリ2 クル2 ムル2 チュル2 我が義利を成就したまえ！常なる摩攪より発生するものよ ソワカ！

Vaiśramaṇāya svāhā! dhana-dāya svāhā! manoratha-paripūrakāya svāhā	毗沙門に　ソワカ！ 財を施すものに　ソワカ！ 如意満足せしむるものに　ソワカ！

(2)木版：satvanāmāśa　＊木版：sukandanāya.　(3)木版：āvarttaiṣāmi
(4)最勝経に従つてsimi 2と読む。木版　siddhi 2

（ハ）大吉祥天女真言

梵　呪	和　訳
namaḥ Śrī-gaṇāya!⑤ namo Vaiśramaṇāya, mahā-yakṣa-rājâdhirājaya! namaḥ Śrīyāye mahā-devye,⑥ tad-yathā: oṃ tara 2 turu 2, suṣṭu 2, maṇi-kanaka-vajra-vaiḍūrya-mukti-namaskṛt âlaṃkṛta-bhūḥ! ＊ sarva-sattva-hita-kāma Vaiśra＝maṇa! Śrīya devi⑦ malaṃvī ehy ehi! gurṇa 2 masa 2, draśana-siddhiṃ⑧ dadāhi me draśana-kāmasya! draśanaṃ prahlādaya-mānā＊＊ svāhā!	南無吉祥（天女）衆！ 南無毗沙門（天王）、夜叉大王中の上王に！ 南無吉祥天女、大天女！　呪に曰く： オーン　タラ2　トゥル2、よしよし。宝珠、金、金剛、瑠璃、真珠もて恭われ、飾られたるものよ！一切衆生の利益を欲する毗沙門（天王）よ！　吉祥天女よ……来たれ来たれ！　グルナ2　マサ2、顕現の悉地（＝成就）を我に与えたまえ！顕現を欲せる（我れに）！顕現を清新ならしめつつ、ソワカ！

(5)木版：₀gāṇāya　(6)正梵：śriye（又ハśriyai）mahā-devyai, 木版：-deve. ＊木版：namâ°　(7)正梵：śrī-devi, 木版：devī.　(8)正梵：darśana-siddhiṃ, 木版：draśaya siddhi.　＊＊木版：°ṇaḥ.

（ニ）大吉祥天女陀羅尼

——大吉祥天女、十二名号経ニ出デタリ——

梵　呪	和　訳
tad-yathā oṃ⑨ Śrīṇi 2 sarva-kārya-sādhani! siṃni 2 nini 2 alakṣmiṃ⑩ nāśaya! svāhā!	即ち、（呪に）曰く：オーン吉祥天女（衆）を導く（天女）よ2、一切の務めを成就せしむる（天女）よ！シニ2ニニ2、不吉を滅亡（ほろぼ）したまえ！　ソワカ！

(9)oṃ木版に欠く。　(10)木版：alakṣme nāśaya!

（10）附録第二　薬師如来縁起

〔注意〕　1．変体平仮名は普通のものに書き換えた。
　　　　2．発音の為の総振仮名は必要と思われるもののみ残した。

甲斐国八代郡自然出現薬師瑠璃光如来縁起夫出現薬師如来といつハ往昔文治年中（1185—1160A.D.）宥日上人と云者菩提の嘉苗を植て六十余州を巡礼する時甲州八代の郡両木八幡宮に通夜す。夢中に神龍現て宥日上人に告て謂く『爰に大石あり。其中に薬師瑠璃光如来います。是を以て汝に附属す』といひ訖て夢覚ぬ。上人希有の想をなし、看に大石あり。『定て此石中に在ん。云何してかこれを得ん』と思議する時、此大石自両に分て佛像忽顕現す。光明十方を照し、異香四方に薫じ、魔宮震動して天花雨の降が如し。上人魂を失ふの信を生じ、皮を剝の誠を致して恭敬供養し、礼拝懺悔す。男女これを聴て輻湊し、貴賤財を投て供養す。是故に金堂不日に戒就して尊像を安置し、荘厳卒に備足して威光を倍増す。これに依て遐邇の道俗誠を致て祈請すれば、百病立どころに愈る事を待。山野の貴賤信を抽て求誓すれば万願忽に意に称ふ。其感物に応じ、其功空からざること、鐘谷の響のごとく、明鏡に向ふに似たり。是故に建久5年（1194A.D.）、武田太郎信義改て堂を建て奥院と号し、如来を安置し奉て国家の繁栄を誓ふ。其後永禄13年⑨（1570A.D.）武田信玄公川中島に於て越後の謙信と相戦ふ時、身方　軍兵已に敗績せんとす。是故に玄公智謀尽て佛力を頼み、法印宥空を招き、薬師の法を修せしむ。嗟呼尊哉奇哉八万の夜叉、⑩軍兵の心中に入て猛虎の勢を生じ、十二神将大将の前後を囲で飛龍の駕に似たり。敵陣これを見て忽懼震戦き、旗を捨て逃走り、弦を絶て平降す。是則薬師如来十二神将八万夜叉等の擁護する所以なり。これに依て信玄公、如来の威光を尊び、夜叉の冥護を仰ぎ、更に十四間四面の金堂を建て如来を尊重し給て、五百石の福田を附除して供養料とす。しかのみならず、軍中著用の錦七条の袈裟、且つ具足箱、毘沙門の像等数多宥空法印に施与す。其後、元亀2年（1571 A.D.）国中一派の僧侶を集め、薬師如来の秘法を修せしめて、国泰民安、武運長久を祈る。其時の吏小幡又兵衛、長坂五郎左衛門、三枝備後守等六人来て奉事する者也。信玄公陣を張り、軍を催す毎に宥空相従ずといふことなし。爾より已降、医王の弘誓日々に新にして、貴賤の恭敬月々に踵を連ぬ。病者は薬を須ず、災横頓に除くことを得、聾瞽の輩杖を捨て蟻行の音を聞き、手足の疾意に随て屈申を弁ずる等、無辺の利益不思議の神用勝計べからず。毛挙に暇なし。故にこれを略して其大綱を述る而已。

享保十二歳（1727A.D.）次ニ丁未ー孟秋吉旦　勧進沙門慈眼寺住、栄秀謹誌。

① 『旗旌帖』参照。昭和3年、大阪、高島屋呉服店編輯。

② 梵咒とは梵語の咒文で、お真言ともいい帰依の誠を吐露する真実言（satya-vacana）で讃仰を内容とする。翻訳名義大集（Mahā-vyutpatti §198, 3—5）にその同義語があがつている。mantram（密咒）は「思惟する√man 為の手段（-tra）」の義。vidyā（明咒）。dhāraṇī（総持咒）は「心に憶持せしめる語（vāc）」の義。‖般若心経には「明咒（vidyā-mantraḥ）」の語あり。‖明王はvidyā-rājaである。

③ 佛梵には Vaiśramaṇa というが、正梵には Vaiśravaṇa という。この語は「Viśravas の子」の義で、この語は「有名なる」の義。故に一名を「多聞天」と称す。財神（dhana-da）でもあり、Kuberaとも称す。

④ 四天王ともいい、東は持国天（Dhṛtarāṣṭra）南は増長天（Virūḍhaka）西は広目天（Virūpâpṣa）北は毘沙門天（Vaiśramaṇa）Mahāvyutpatti § 164, 31—35には総称して「護世天」(loka-pāla）といい、その眷属を「四大天王衆」(Cātur-mahā-rājika-kāyika）という。

⑤ 梵語では sad-dharma（善い法）という。

⑥ Vaiślimanaya は佛教梵語では Vaiśramaṇāya であり、右行下から9字目の oṃ につづいて『帰命毘沙門天』を意味する文となる。その間に8字（多方4語であろう）が挿まれているが、今これを除いて読んで見ると詳しくは oṃ（＝namo）me＋astu te Vaiśramaṇāya！（我れ、帰命の至情を汝れ明王毘沙門（天）に献ぐ）の句となる。

⑦ hūṃ hūṃ phaṭ!（悉曇では訛つてウン　ウン　パッタと発音される)。hūṃ は忿怒の擬声であり、phaṭ は破摧の擬声である。『ウン　ウン　ガチャーン』という位の意味の句に過ぎない。

⑧ 正梵 Śriyai, Śriye（吉祥天女〔Śrī〕の為に〔帰命す〕この天女はまた Lakṣmī ともいう）

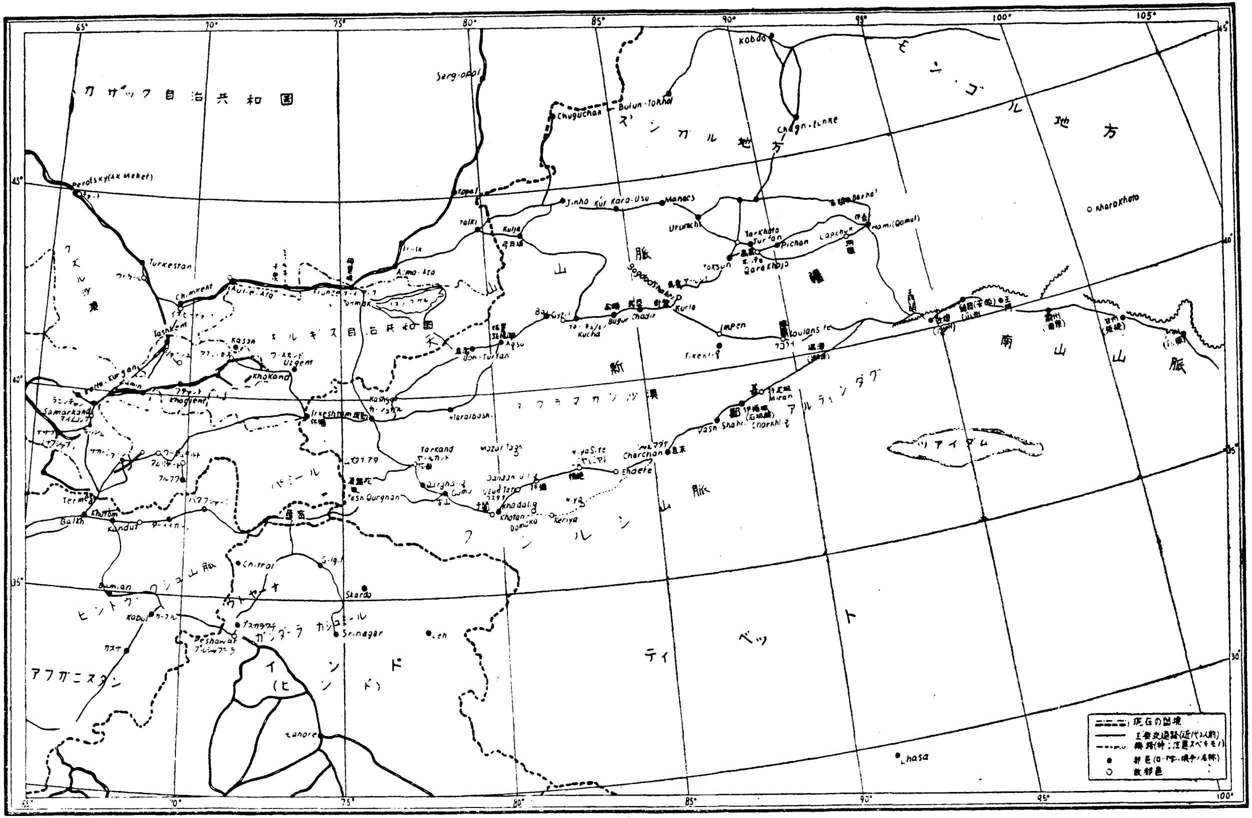
⑨ 永禄13年（1570A.D.）とあるは永禄4年（1561A. D.）の誤なり。この年川中島の戦は2回目で、これが最終の川中島戦であつた。慈眼寺にある信玄公の袈裟裏書にも『永禄十二年に寄附』とあり。

⑩ 夜叉（梵yakṣa, f. yakṣiṇī）註釈家たちはyaj（祀る）より解釈し『祀らるべき鬼神』の義とするが、語源不明。恐く原住民の民族信仰に根ざすものであろう。森林、原野に住み、人を助けたり、時には傷けたりもする。西欧神話の『森の精、水の精』に当る。毘沙門天や薬師神将の手兵となり、焔魔（yama‘双身’）神の獄卒である。——Pāli English Dict. (Stede) yakkha 参照。‖夜叉に類するものに羅刹（rākṣasa, f. rākṣasī）がある。多くは『悪羅刹』で悪意に充ち、人中に住み、人を噉う。Laṅkā 島（＝Ceylon）

に住む羅刹どもの王は Rāvaṇa と称し、Rāmāyana (叙事詩) Laṅkā'vatāra (経) に活躍す。

(12) あとがき

この小論の為には『まえがき』に記した方々の外、身延山大学教授塩田義遜先生、慈眼寺の宮城真秋師の厚き御援助を受けました。厚くお礼申上げます。(甲府、山大学にて、昭和 30.12.28)



カザック自治共和国
キルギス自治共和国
ジュンガル地方
モンゴル地方
天山山脈
新疆
タクラマカン沙漠
アルティンダグ
パミール
コンルン山脈
南山山脈
ツァイダム
ヒンドゥクシュ山脈
チベット
インド
(ヒンド)
アフガニスタン
ガンダーラ
カシュミール
Kobdo
Sarg-opol
Chuguchak
Bulun-Tokhoi
Perofsky(Ak Mehet)
Turkestan
Chimkent
Aulie-Ata
Frunze
Tokmak
Alma-Ata
Kulja
Jinho
Kur Kara-Usu
Manass
Urumchi
Turfan
Pichan
Qara Khoja
Toksun
Hami(Qomul)
Kharakhoto
Tashkent
Kokand
Uzgent
Samarkand
Aqsu
Kucha
Bugur
Kurle
Loulan
Kashgar
Irkeshtam
Yarkand
Khotan
Keriya
Charchan
Miran
Khulm
Balkh
Kunduz
Chitral
Gilgit
Skardo
Srinagar
Leh
Kabul
Peshawar
Lahore
Lhasa
現在の国境
主要交通路(近代以前)
都邑(ローマ字・現今ノ名称)
故都邑